東京都北区立袋小学校

令和5年度　北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和5年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、「書くこと」に関する領域においては、学年が上がるにつれて区の平均正答率を下回る傾向が見られた。普段から書く習慣を身に付けられるよう、低学年のうちから書く力の育成を推進していきたい。
社会	学校全体（5，6年）の社会の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等である。やや知識の定着に課題が見られる様子があることから、単元学習後に復習の機会をもつなどの工夫をしていきたい。また、内容別では「都道府県の様子」「工業生産」で課題が見られているため、知識・技能面の定着を図っていく必要がある。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、学年が上がるにつれて区の平均正答率と同等となる傾向が見られた。特に、観点別では「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が低くなっている。基礎・基本的な力の定着を図るとともに、問題解決型の授業を展開させていく必要がある。児童自身が自らの学習課題をもち、主体的に学習に取り組んでいけるようにしていきたい。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。どの領域や観点別においても、区の平均正答率を上回っているものが少ない。このことからも、基礎・基本の定着を図りつつも、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。

本校の教育目標

〇よく考える子

〇体をきたえる子

〇思いやりのある子

〇最後までやりぬく子

学力向上にかかわる経営方針

・「わかる」「できる」喜びを味わえる授業改善
・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実
・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進（きたコンの扱い方を含む）
・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用

本校が児童に育成したい力

・生きて働く「知識及び技能」の習得
・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

校内における学力向上推進体制

学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点

指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・Q－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの計画 ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携	・運動の楽しさや喜びを味わい、三つの資質・能力を育む体育学習を目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観−ブロック会での事後検討を通して− ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月１回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （5年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率は、区の平均正答率を下回る結果となっている。学年の内容別正答率を見ると、「学校をしょうかいする新聞をつくる」が顕著な課題となった。「文章を書く」ことは、区の平均上回っているため、必要な情報を取捨選択し、活用していく力を着けることが必要である。	まずは、様々な情報を継続して読む時間を充実させる。特に、新聞を比較して読むことや、図書室で自身の目的に沿った本を探す活動は定期的に取り入れる。次に、情報を取り扱う技法を指導する。そして、収集した多様な情報を共有したり、まとめたりする段階では、課題解決につながる文章を取り出し、必要な情報を選び、自分の考えや表現に役立てる練習を行っていく。	国語の授業だけでなく、社会や総合的な学習の時間等の他教科においても、情報の収集・活用をして自分の考えをまとめる学習は、積極的に取り入れていく。また、情報を取り扱う技法については、様々な思考ツールの活用を経験させ、適切に情報が整理できるよう指導を充実させる。また、成果物をポートフォリオにし、学習の足あとを残すことで、児童の自信に繋げる。
社会	全体の平均正答率は、区の平均正答率を下回る結果となっている。学年の内容別正答率を見ても、ほとんど全ての項目で平均点を下回っている。単元の大まかな内容は理解できていても、「社会の言葉」を覚えていないことや、一部の児童で資料の読み取り方を理解してしないことが原因と考えられる。	社会科見学の実地での学習体験や、動画教材を効果的に活用するためにも、事前に児童に課題意識をもたせるような授業展開を工夫する。また、資料の読み方や活用の仕方を丁寧に指導する。「社会の言葉」を児童が意識できるよう教室掲示を工夫し、既習の言葉を使って考えを交流させたり、ノートにまとめさせたりする学習を積極的に取り入れる。	学習課題に沿って、児童が調べる活動を継続的に行っていく。資料は、教科書だけでなく、資料集や動画教材等、児童自身に選択させ、どの資料からどんなことがわかったのか、根拠をもって説明できるよう児童同士で交流させたり、全体で発表させたりする。
算数	領域別・内容別・観点別正答率の8割は、各目標値を上回る結果であった。しかし、区の結果と比べると、全体的に平均以下となる結果となった。内容別正答率の各項目を見ると、「わり算・計算のきまり」が大幅に区の平均を下回っている。「小数」、「分数」の項目の値も低いので、計算の仕方だけでなく数の概念や量感にも課題があることが分かった。また、主体的に学習に取り組む態度の数値が区の平均を下回っているため、児童が興味をもって学習に取り組めるような工夫が必要である。	児童が関心・意欲をもって学習に取り組めるよう、具体物を用いたり、日常の中から問題を設定するなど、導入の工夫を行う。また、習熟度別学習において、じっくりと取り組む必要のある児童が入るクラスは最低人数での実施を心がけ、手厚く支援してく。また、中位の児童が集まるグループは学力差が非常に大きくなるため、児童間で協働的な学びの機会を適宜設け、学習の進みが早い児童も充実した活動ができるように工夫を行う。習熟度が高いクラスは、授業内容に沿った補充プリントなども準備し、学習に対する意欲をもたせる工夫を行う。	学習内容の理解が深まるよう、家庭学習に既習事項を取り入れたプリントに取り組ませたり、ICT端末を活用し、日頃からアプリケーションの問題を出すようにして定着させていく。個別支援が必要な児童には、パワーアップ講師の力を借りるなどして課題を解決し学習に主体的に参加できるようにする。さらに一人一人の課題が明確に表れるICT端末のAI機能を利用して、個々の課題解決を図っていく。
理科	領域別・内容別・観点別ともに多くの項目で、区の平均を上回る結果となった。しかし、内容別に見ていくと、「物の体積と温度」、「物のあたたまり方」については区の平均を下回る結果だった。全体を通して「エネルギー」に関する領域に課題があることがわかった。「エネルギー」は「物理の」基盤なる単元である。身の周りの物から興味を抱かせ、実験で成功体験することが学力の定着の近道である。予備実験をしっかりと行い、学習のまとめにつながるようにしたい。	実験結果を正しく理解するために、理科支援員と連携し、予備実験を行ったり事前準備を周到にしたりする。正しい実験結果を基に考察をする時間を十分に確保し、実験結果から考える習慣を身に付けさせる。	授業始めに実験結果を確認したり、小テストを適宜行ったりすることで定着を図る。また、児童から出た疑問を元に教科書外の実験も行うことで、理科への興味・関心を高めていく。ICT機器を使って、実験動画を見せながら効果的に学習のまとめをさせたい。